

主体は外部実在の存在をどう導くか：哲学から生物学へ

中島 敏幸 (Toshiyuki Nakajima)

愛媛大学大学院・理工学研究科

“私(主体)”はいかにして自己の外部に何か実在する事を知ることができるのか、という問題は哲学における基本的問題の一つである。デカルトの懐疑が示すように、知覚内容が素直に外部実在の存在を示しているとはいえない。このことは、夢や幻覚を考えると容易にわかる。自己はその外に出て自己を含む全体を見渡すことはできない。では、自己のみが存在するという独我論から脱出して、自己の内部から外部の実在の存在をどのようにして導けるのか(知ることができるのか)。この問題は、哲学だけの難問ではない。科学の営みにおいては、科学(者)はデータ(現象)からいかにして科学理論における実在を導けるのかという問題がある。また、“私”という主体を人間という生命の一個体として見れば、この問題は、生物学の問題にも直結する。さらに、主体を、脳のような認知機能を備えた動物のみならず、“環境”という外部に適応する特性を持つ生命システム一般に拡張すると、細菌や植物をも含むあらゆる生命システムが抱える普遍的な問題として一般化することができるだろう。

この問題に対して、演者は一つの理論的モデルを用いたアプローチを行ってきた(Nakajima, 2001, 2015, 2019)。そのモデルの概要は以下の通りである。(i) 知覚の時間変化を所与(データ)として仮定する。データを構成する各知覚を記号化して(知覚・意味内容を無視して知覚内容の違いのみを扱う)、その時間変化を記号列として表す。

(ii) この記号列において前の記号が次の記号を一意決定するように(因果律)、必要に応じて新たな記号を導入する、という過程を考える(これを「逆因果律」と名付ける。逆因果律は因果律の対偶で表現される)。この逆因果律の原理に基づいたアルゴリズム過程(以下、「逆因果律過程」)が、この所与の記号列に存在しない新たな記号要素を導く。(iii) この導かれた要素は、自己(所与の状態列)の外部に存在する実在を指し示すシンボルである。

本発表では、このモデルを紹介し、その主な結論として、以下のことを述べる。(1) 逆因果律過程による新たな記号の導入は、主体が外部の実在を“計測する”ことを意味している。(2) 逆因果律は因果律の対偶であり、ゆえに、主体が外部の実在の存在を計測する(知る)ことが可能であるためには、因果律と同値の原理を仮定しなければならない。これらの結果を、Husserlの現象学、情報概念、量子力学における観測と実在との関係(Wheelerのit-from-bit)、生命システムの環境適応としての“環境の内部モデルの構築”、等の問題と関係付けて、結果が意味することを整理し、このモデルを用いた理論の課題と展望を議論する。

Nakajima, T. (2001) *Int. J. Gen. Syst.* 30, 681–702.

Nakajima, T. (2015) *Prog. Biophys. Mol. Biol.* 119, 634–648.

Nakajima, T. (2019) *Entropy*, 1–26. <http://doi.org/10.3390/e21020216>